

草庵仏教

第167号
(発行日)
2004年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou4@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

ある惑いに答えて

N 「いつもDさんから、お念仏の話をお聞きし、お念仏に親しんでいます。今まで聞法してきた中で気がかりなことがありました」

D 「どんなことですか」

N 「ずっと以前のことで。熱心に聞法された方で大変親しくしてくださった方がいまして、70才を過ぎて亡くなられたのですが、亡くなられる前、病床にお見舞いに行きました。末期のガンでしたが自宅療養をしておられ、お見舞いした時は病状が悪く「痛い痛い」と苦しんでおられました。それで私は、その方には何でも話せましたので、〈こんな時こそ、南無阿弥陀仏が出ないですか〉と申しましたら、すごい顔をして「痛い時は痛い！」と叱られました。この時のことは、私への大事な問いかけとして今も心に残っています」

D 「カラダが苦しい時にお念仏が出ないというのは、一つには、真宗の聞法をされていても、日常生活の中でお念仏に親しんで称えていない人は、急にお念仏を勧められてもお念仏を申しにくいですし、特にカラダの具合が悪く気分が悪い時にはなおさ

らですね。」

N 「日頃お念仏を称えていない人は、苦しみが襲って来たからといって急にお念仏を申すようになるという風にはなかなかならないということですね」

D 「そうです。聞法はしているけれども、専ら仏法の話の聞くのみで実際にナムアマミダブツと称えるのはお内仏の前とかお寺にお参りした時だけで、日常生活の中でお念仏を實際に申すことがない、そういう聞法のタイプの人は苦しみに遭ったからといって、すぐにはお念仏が口に出にくいという現実があります。何の抵抗もなくまずお念仏が日頃出る人と日頃はめったに称えないので出にくい人がいますから、随分熱心に聞法してきた人でも実際の称名念仏に親しんでいない人は出にくいと思います。もしかしたらNさんのおっしゃるその方は聞法は熱心でもお念仏を申すことはあまりされなかつた人かも知れません。もちろん日頃念仏されないので救われないなどということは絶対にいえません。救いは称えたから救われるとか称えなかつたから救われないとは決められないものです」

D 「それから、お念仏を申しても、自分の人生にとって大変大事なものは受け取られていない場合があります。これは広く真宗の聞法全体にいえることですが、日頃よく念佛聞法しているようでも、〈このこと一つを是非とも聞かねばならない〉というほどに我が身にとって聞法に大事がかかっている場合です。このような人は他に大きな問題が起こるとお念仏を忘れてしまったり、聞法どころでなくなったりします。人生の危機にぶつかると、その人が仏法にどれほど身を入れていたかが露わとなります」

N 「お念仏や聞法が自分にとって本当に大事なものになつていない場合には病気の苦痛が激しくなるとお念仏どころではなくなる場合があるということですね」

*

D 「さらに言えば、日頃お念仏を称えることがあっても、お念仏の有り難さや尊さが実感できず、まだお念仏が本当に身に付いていない場合には、身近に困った事が起こると、それこそそのことで頭がいっぱいになって、お念仏どころではなくなります」

D 「ええそうです。お念仏の有

難さが実感されない間は、やむをえないでしょうが、実感的にお念仏が味わえるように十分に聞法念佛を重ねることが大切です」

N 「念佛聞法を重ねていくのが大事なのですね」

*

D 「それからもう一つはお念仏に日頃親しみ、お念仏の尊さや有難さを身にしてみても実感している人でも、カラダがひどく苦しい時は「痛い、痛い」よりなくなってしまうことがあります。痛くてそれこそ念佛どころではなくなるのです。称える余裕がなくなるのです。熱でも40度をこえると苦しいばかりで、その時には念佛は出なくなるということは十分あり得ます。念仏者として知られた木村無相さんはひごろずいぶんお念仏を称える方でしたが、心臓発作で激痛が走る時は念佛どころではなかつたとよく言われました」

N 「この場合は救いを見失つたのですか」

D 「いいえそうではありません。お念仏は称えたから救う、称えないなら救われぬといういわれではありません。私の称える称えぬに関係なく、〈助ける、引き受ける〉の大悲がかかっているのです。その大悲に一度あえば、もはや私に離れぬ佛とともに生きる人生が始まります。たとえ惚けても阿弥陀様に連れられて浄土往生です。如来の大悲がお

念仏となつて口に出てくださり、またお慈悲を思うと称えずにはいられないし、またお念仏が大

変樂に出てくださるのです。ですけれど、激痛の時や、気分がこ
とに悪い時や、あるいは地震な
どの非常時の最中には念仏は出
ない場合があります。しかし、
出ないからといってお助けがな
くなるわけでも、救いを見失う
わけでもありません。私の称え
る念仏がお助けの役に立つので
は毛頭ないのです。お助けは阿
弥陀仏ばかりのお仕事です。
であればこそ、阿弥陀仏の慈悲
を思えば称えずにはおられない
ということもありますし、称え
ればよいよ有難いものです」
N「そうすると、称えられない
からその人は救われないとか、
救われないとかはいえないの
ですね」
D「ええそうです。ですからひ
とたび撰取不捨の大悲にであつ
てみれば、カラダが痛くて称え
られなくても悔やむことも不安
になることもありません。痛い
時はそれこそ痛いだけで念仏忘
れていても、阿弥陀様のお助け
の手の中なのです」

N「でしたら私の知人の場合は
どれなのでしょう」

D「あなたのその知人が（痛い
時は痛い）といわれるのが、ど
ういうものなのか、現場にいな
い私には分かりません」

N「お念仏を勧めても、相手が

病氣などで身体が苦しくて、称
える余裕がない時はどうしたら
いいのでしょうか」

D「相手の方が真宗の聞法者な
ら、体力が大変弱っている時に
無理に（念仏しなさい）とお勧
めするよりは、あなたがその方
のそばでお念仏を称えてくださ
るのが良いと思います。あなた
のお念仏を聞いて、病人は自然
にお念仏を申す場合もあるし、
また称えられなくてもあなたの
お念仏を聞くだけでいいのです。
お念仏は自分が称えようとも他
者が称えようとも、（助ける、引
き受ける）の大悲の喚び声です。
聞くばかりでいいのです。真宗
のお念仏はかならず称えなけれ
ばならないというようなもので
はありません。人の称えている
お念仏が耳に入つてナムアミダ
ブツと聞こえること、それが（お
前を助ける弥陀がついている。
助けるぞ助かるぞ）の阿弥陀仏
の思召しであり、あなたを救
いたもう証拠なのです」
N「苦しい時は念仏を称えなく
ても聞くばかりでもいいのです
ね」



端折笠
(C)SHOGAKUKAN INC.

D「もう一つ付け加えますと、
お念仏をお勧めする方自身がお
念仏の有難さを実感して相手に
お念仏を勧めて言っているのと、
お念仏の尊さや有難さが分から
ないまま人に向かつて（お念仏
ができませんか）という場合は、
何かしら違うのではないでしょ
うか。もし自分にも有難く思え
ないものを人に勧めている場合
は重苦しい感じが相手に伝わっ
て、何か強制のように感じられ
るのではないのでしょうか。そう
なると反発のような返事が返つ
てくることもあり得ましょう。

ところがお念仏を勧める人がお
念仏の尊さ有難さを実感してい
て人に勧めると、いかにも自然
で無理がなく、勧める言葉にも
おのずからなる有難い感情がと
もなつて、相手にもそれが伝わ
ります」
N「なるほどお念仏を勧める側
に問題があつて、それがために
勧められた人が反発を感じるこ
う事があるのですね」
D「そう思います」

N「それから別の方ですが、こ
の方も真宗の聞法に熱心な方で
した。80才を過ぎて亡くなられ
ましたが、亡くなられる数日前
に病床に参りました。その時、
いろいろなお話をされましたが、
最後に（感謝とザンゲだぞ）と
おっしゃいましたので、ハイと
言いました。すごいなあと思ひ

ながら、りっぱな言葉に遠くな
つていく自分、なんでだろうと
今でも思っています」

D「聞法の先輩が亡くなる前に
（感謝とザンゲが大事だぞ）と
遺言のように言われたのですね」
N「ええそうなんです」

D「それを聞いたあなたは、す
ごく立派な言葉だと感心したの
ですが、それを自分に引き当て
て見ると、どうもそうなってい
ない。むしろ感謝する生活から
もザンゲする生活からも遠い自
分を感じられたのです」
N「ええそうなんです。それで
聞法を長年続けていながら、ど
うして自分はいつまでたつても
感謝もザンゲもできないのだろ
うかと悲しくもあり惑いもあり
ます」
D「感謝もザンゲもなかなかで
きない、そんな貴方にお念仏は
どう聞こえますか」
N「そこがよくわかりません」
D「聞法していつかはその先輩
のように感謝やザンゲができる
ような立派な聞法者になれると
思つて聞法に励んでこられたよ
うですが、もしそんな立派な聞
法者になれるのなら、お念仏は
必ずしもなくても良いかも知れ
ません。けれどもいつまでたつ
ても信心者らしい者にも聞法者
らしい者にもなれない、あいつも
かわらぬ私が残るなら、それが
実は阿弥陀様のお目当ての人な
のではないですか」
N「そうすると感謝やザンゲが

できればたいしたものかもしれ
ないが、そうしたものからほど
遠くなつてしまつてこの私。
信心者らしい者にも聞法者らし
い者にもなれず、そういうもの
からほど遠くなつてしまつてい
る私。こんな私が阿弥陀様の目
に一番にかかつているのです」
D「そう思います。そんなあな
たに（我が名を称えよ）と仰せ
下さるお念仏は、そのままがあ
なたへ呼びかけたもう阿弥陀様
です。（そんなお前だから世話し
に来た）と喚びかけたもうので
す」

D「私を助ける世話を阿弥陀様
がしてくださる、一切してくだ
さるといのがお念仏のお心な
のです」

D「そうなんです。ですから感
謝ができねばナンマンダブツ、
ザンゲができねば、いよいよナ
ンマンダブツと、阿弥陀様のお
世話になるしかないし、また（ど
うか世話させてくれよ）とまで
仰せ下さるナムアミダブツです。
この度は、このナムアミダブツ
に助けられての往生なのです」
N「そういうお念仏ですと感謝
ができないままで有難いし、ザ
ンゲができないままで（如来様、
申しわけありません）という、
不思議にも感謝できないままで
の感謝、ザンゲできないままで
のザンゲの気持ち湧いてきま
す」
D「有難いですね」（了）

言いました。すごいなあと思ひ

歎異抄 第十五章第二講

おおよそ、今生においては、煩惱
悪障を断ぜんこと、きわめてありが
たきあいだ、真言・法華を行ずる淨
侶、なおもて順次生のさとりをい
る。いかにいわんや、戒行惠解とも
になしといえども、弥陀の願船に乗
じて、生死の苦海をわたり、報土の
きしにつきぬるものならば、煩惱の
黒雲はやくはれ、法性の覚月すみや
かにあらわれて、尽十方の無碍の光
明に一味にして、一切の衆生を利益
せんときにこそ、さとりにてはそう
らえ。

(歎異抄第十五章より)

〈語句の説明〉

悪障 (仏道を邪魔しまたげるもの)
真言法華 (真言は真言宗、法華は天台宗)
淨侶 (戒律をたもつ清らかな修行者たち)
順次生 (次の世)
報土 (真実の浄土)
法性の覚月 (ものの真実なる本質を覚ることを月にたとえる)

〈現代語訳〉

(この世で煩惱をたち罪悪を滅することなど、とてもできることではないので、真言密教や法華一乗の行を修める徳の高い僧であっても、やはり次の世でさとりを開くことを祈るのです。まして、戒律を守って行を修めることもなく、教えを理解する力もないわたしどもが、この世でさとりを開くことなどできるはずもありません。しかしそのようなわたしど

もであっても、阿弥陀仏の本願の船に乗って、苦しみに満ちた迷いの海を渡り、浄土の岸に至りついたなら、煩惱の雲がたちまちに晴れ、さとりの月が速やかに現れて、何ものにもさまたげられることなくあらゆる世界を照らす阿弥陀仏の光明と一つになり、すべての人々を救うことができのです。そのときにはじめてさとりを開いたというのです)

*

修行してこの世の一生の間に我が身の煩惱を無くすとか、罪を滅すとか、あるいは即身成仏といって人間の身のままで佛になるとかいうことは、それは理想としては非常に高貴な願いであっても、現実には達成されることは極めて難しいことはいまでもありません。それでも何とかして達成したいと真面目に修行に励む人たちも、やがて自らの「力及ばぬ」ことを痛感して、次の世に阿弥陀仏の浄土に生まれるとか弥勒菩薩の兜率天に生まれるとかして、そこで修行を完成して煩惱を断じて佛になるとされました。あるいは5億7千万年たつて弥勒菩薩がこの世にお出ましになり竜華樹の下でお悟りになつて説法をされる、その法座に生まれあわせていただいて覺りを開こうと願われました。仏教の歴史の上では多くの高僧方が、長いこの世での修行の暁に、亡くなられる前には次の世で阿弥陀仏の浄土や兜率天に生まれることを祈り、そこで更に修行を積み重ねたようだとされたのです。

そんなわけで、聖道門の修行をする真言宗や天台宗の真面目な修行者でさえ、この世で修行して佛になるのは極めて難しいと感じて順次生という次の世に娑婆よりもっと修行に適した領域に生まれ

て、そこで佛になろうとされたのです。真面目で厳しい修行をしている人たちでさえ、この世でさとることを断念されるのに、この煩惱の盛んな身もちながら、信心を得るともう「この世でさとりを開いたのだ」とか「信心を得たら佛になったのだ」というようなことをいうのはもつてのほかのことである、と唯円房はいわれるのです。

*

凡夫は煩惱が盛んで戒律もたもてず深遠な仏法の道理を了解することもできないで、迷いの海から出れないでいる、こうした凡夫を救おうと私どもの所まで来て、「乗れよ、かならず涅槃の岸に渡すから」という不可思議な誓願の船を弥陀は凡夫にさしよせてくださるのであります。この願船に乗せて頂いて、この世を終えて阿弥陀仏の浄土に生まれさせていただく。そして浄土にて一切の煩惱がのぞかれ罪が消えて阿弥陀仏のお徳と一つなつて衆生利益の徳をいただく、そういう仏徳を得てこそ「さとりを開く」といえるのであります。

*

弥陀の〈願船〉とか、〈苦海〉とか、報土の〈岸〉とか〈渡る〉というのは比喩的な表現で本願の救済を教えてくださいているのです。

弥陀の願船というのは本願力を船に譬えたもので、この船は苦しみの海を渡つて浄土へと私たちを乗せてくださる、そういう有難い働きなのであります。その本願力の船はどこにあることにあると聞いて、見たりつかんだりすることのできない、目には見えない不可思議な働きといわれています。その働きが「言葉」となつて、私たちにであつてくださるの

が本願の言葉であり、それが名号となつて喚びかけてくださいます。

本願の船は「乗れよ」と喚んでくださる。乗れよは任せよであります。名号は端的に、「乗れよ、任せよ、浄土に連れて行く」であり、乗れよというも、これからそれじゃあがんばって乗りにましようというものはありません。どうしたら乗れるかという手間も暇もいらぬのです。これについては聖人の『尊号真像銘文』に

「乗我願力というは、乗はるべしという、また智なり。智というは、願力にのせたまうとしるべしとなり。願力に乗じて安樂淨刹にうまれんとするなり」

と教えてくださっています。「乗れよ」「乗るべし」というも、「願力にのせたまう」と知る「こと」他にはないのです。これから乗ろうというのではあります。「こんな私をこのまま乗せてくださる」と知らせていただくだけであります。「乗れよ」というのは「汝を我は浄土へ乗せていく」とのお知らせを「しるべし」となり、この大悲のお知らせを聞かせていただくことのであります。「たのめ」も「まかせよ」もお知らせでありませぬ。佛は私どもに対して「まかせなければ救わない」といわれるのではあります。「連れていく」のお知らせを聞いて「乗せて連れていく」の知らせることよ」と安心させて頂くのです。お知らせを聞いていますまが助けにあつて無用です。仰せを聞いてからのからは無用です。南無阿弥陀仏は「連れて行く」の仰せであり、私を携へ取つてくださつていたもう証拠(しるし)であります。